

コウノトリ湿地ネットニュースレター



▲戸島湿地のハチゴロウ

創刊号 2009年1月1日発行  
コウノトリ湿地ネット  
豊岡市城崎町戸島858-1  
電話 0796-32-3610

指定管理者になって

昨年末「豊岡市立ハチゴロウの戸島湿地」の指定管理者に決まりました。管理棟は巢塔が正面に見え湿地内の自然が楽しく観察できる大変素晴らしい場所に立っています。湿地ネットの活動も1年ちょっと経ちましたが、いよいよ、戸島湿地を拠点とした活動が始まります。コウノトリによって集まってきた仲間達と、いろいろな生物を観察し、育て、共生していきたいと思えます。みんなの力によって自然豊かな豊岡・兵庫・日本になるようにこれからも、ご協力よろしくお願いいたします。

コウノトリ湿地ネット代表 横田登代子



▲工事中の戸島湿地(2008年12月19日)



## コウノトリ野生復帰における「ハチゴロウの戸島湿地」の役割

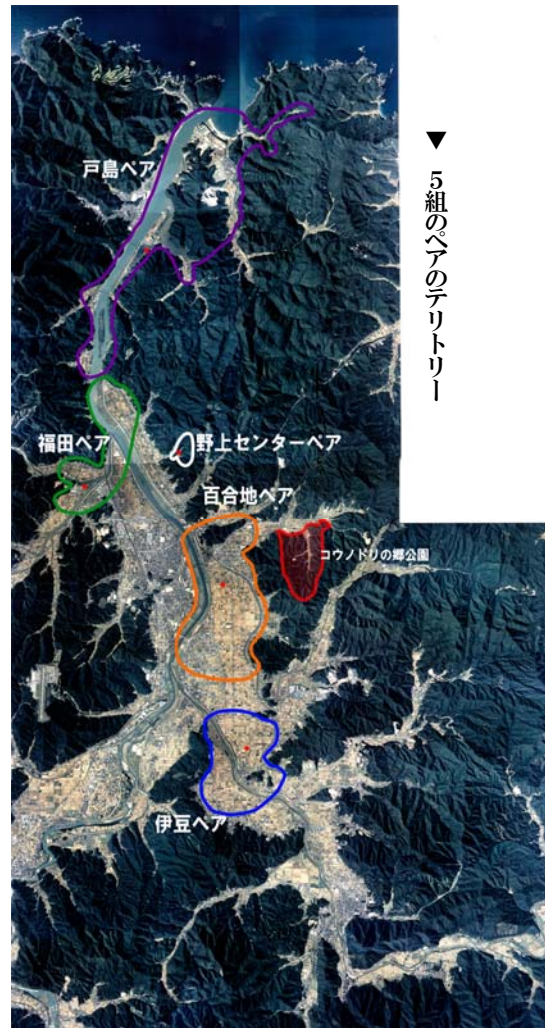
「野生復帰」とは、(乱獲と開発等による)生息環境の悪化により野生個体が消滅してしまった一つの「種」を、①人工飼育で増殖し、②かつての生息地に再導入し、③地域個体群を形成させ、④将来にわたって「種」の保存を図ることを目的としています。コウノトリの場合、豊岡では①②をクリアし、③の段階に入っています。いよいよこれからが正念場です。

もちろん、コウノトリが野生本来の姿で健康に暮らしていくには、②の「かつての生息地」も③の「地域」も「日本全域」に対象を広げなければなりません。とは言え、現段階ではそのような認識を持ちつつ、市民グループとしてふるさと・豊岡盆地での個体群形成の取組みに参加していきたいと思います。

### 放鳥コウノトリたちが豊岡盆地個体群を形成していく過程が少し見えてきたぞ

これまでに21羽(2005年7羽、2006年7羽、2007年5羽、2008年2羽)のコウノトリが飼育下から放され(うち1羽は死亡)、ペアとなった5組から9羽(2007年1羽、2008年8羽)のヒナが孵化・成育して、計29羽が野外で暮らしています。野生復帰③の段階がこんなに早く進展するとは予想していませんでした。生きものの勢いのすごさにびっくりしています。しかし、油断は禁物。まだまだ不安定な要素が一杯です。現段階でのコウノトリの動きを少し整理してみましょう。

まず、5組のペアが盆地の中でそれぞれ自分の縄張り(テリトリー)を持ち出したようなので、右図に表してみました。



▼ 5組のペアのテリトリー

採餌状況を見てみましょう。どのペアも、営巣場所を中心とするテリトリー内で餌を探し、不足分は給餌を利用するというパターンです。それぞれの餌場は、百合地ペアが河谷放鳥拠点(給餌あり)を中心とする広大な六方田んぼ北部、伊豆ペアが加陽地区東浦の堤外田ビオトープを中心とする六方田んぼ南部、福田ペアは営巣場所周辺の田んぼ(稲作田+ビオトープ田)です。つまり、それぞれに核となる餌場が存在していることがテリトリーを安定させている大きな要素だと言えるでしょう。例外は保護増殖センターペアで、オスがまだ2歳と若く、昨年の営巣場所もセンタ

一内飼育ケージ上であったことから、ペア自身や採餌場所にも不安定さが残り、そのためテリトリーもセンター内に止まっているようです。今シーズンに明確になるのか注目したいと思います。

問題は戸島ペア。このペアは昨年3月にペアとなるや、ハチゴロウの戸島湿地内の人工巣塔で営巣し、戸島湿地を中心として簸礫(ひのそ)島以北の田結地区までを餌場にしていました。基本パターンの典型です。テリトリーの南北境界線もはっきりしており、他のコウノリたちは決して玄武洞から北へは行こうとしません。ところが、この戸島ペアのテリトリー内で、昨年11月以降、難問が生じてしまいました。

#### 給餌による営巣・テリトリー維持を誘導する試み

「ハチゴロウの戸島湿地」の整備工事が遅れ、繁殖シーズンを控えながら、営巣地であり餌場の中心である湿地に寄り付けなくなったのです。原因は2つ。1つは、昨年3月から工事着工予定だったところ、着工直前の3月中旬にペアが巣づくりをしだし、下旬には産卵したのです。急遽、県、市、コウノリの郷公園と業者の話し合いに当会も加わり、ヒナが巣立ちするまで工事はストップとなりました。コウノリにとっては大変ありがたい措置でしたが、この3ヶ月間が後で大きく響いてしまったのです。もう1つの原因は、湿地地盤が予想以上に軟弱で造成工事が難航したためです。

生物相が豊かな場所であっても晩秋から冬期間は餌生物が少なくなるのが普通です。ましてやこのテリトリー内(円山川下流域)は平地が少なく、生きものの姿はほとんど見えません。ペアは、たまに飛来はするものの郷公園の給餌に頼ってばかりで、工事中の湿地・巣塔には寄り付こうとしません。湿地完成はまだ先であり、このままでは営巣はおろかテリトリーを放棄しかねません。



▲2008年12月18日戸島湿地工事中

そこで、当会による営巣誘導作戦が実行に移されました。給餌を工事から少し離れたところから始め、餌を認識したら給餌場所を工事中の湿地内に移すというものです。11月26日から開始したこの作戦は今のところ功を奏し、12月7日以降は巣塔でも泊まっています。(ペアが営巣～繁殖まで進めば、改めてプロセスを報告したいと思います)

#### 「ハチゴロウの戸島湿地」は、玄武洞以北の要(かなめ)

コウノリの生息可能数は、その地域に存する餌量によって増減されます。しかし、豊岡盆地という限られた範囲での地域個体群の初期形成過程では、テリトリーの地域バランスも重要だと考えています。戸島湿地は、畑上、田結を含めた円山川下流域におけるコウノリ生息の核となるべきものであり、現実にそうしなければ野生復帰③段階が進展しません。

今後、ペアの数やテリトリー範囲・場所等は各地域での自然生態系再生の取組み如何で変わってくるでしょうが、何はともあれ、現在のテリトリーは彼らがせっせと開拓し築いたものです。暖かく見守りながら、同時に、人間の知恵と努力でより良い方向に誘導していくことも私たちの責務だと思ふものです。

(コウノリ湿地ネット副代表 佐竹節夫)



## コウノトリを巡る環境は今

2005年にコウノトリの郷公園から初めて5羽が放鳥され、引き続き、06、07の放鳥、そして放鳥されたコウノトリたちの産卵、ヒナの巣立ちと続いて、2008年の現在、豊岡の空には29羽のコウノトリたちが舞うことになりました。(数羽は豊岡の外へお出かけしていますが)この目を見張るばかりのコウノトリたちの頑張りに私たち人間は答えることができているでしょうか。豊岡の現在を見つめてみたいと思います。

.....

**コウノトリの生きていける環境を作ること。コウノトリを巡る自然再生の試みが始まっています。**

まず、豊岡市内をつらぬく円山川の自然再生です。これまで進められてきた河川改修により、さまざまな生物が失われ、それをえさとしてきたコウノトリたちは絶滅しました。現在、自然再生に向けて、河川改修時に、高水敷を掘り下げて、堤防からつながる湿地を作っています。現在は、戸島から出石川まで工事が行われていますが、工事が行われた地点では、生物の種類が増えたことが確認され、今年の秋には、15羽もの放鳥コウノトリたちが、採餌に舞い降りたことが確認されました。この工事は2003年から行われており、現在は2004年の台風23号を受けての治水工事と一体的に行われています。本格的な円山川の自然再生の試みに注目しています。

次に、大きな取り組みとしては**湿地の再生**です。市は、野生のコウノトリが度々訪れていた戸島の湿地を買い上げ整備し、今春「ハチゴロウの戸島湿地」として完成する予定です。円山川中流域では、国土交通省により「加陽堤外田」河川—水路—水田と繋がる大規模な湿地造成が計画されています。個々の市民による、小規模湿地の試みも

行われています。現在の状況としては、まだ、端緒に立ったというところ です。

**農地に対する取り組み**は、「コウノトリ育む農法」として、2002年から試験開始、2005年から本格的な取り組みが開始され、減農薬、有機農業、中干し延期、冬期湛水、魚道の設置などが行われています。2003年には0.7haの田んぼが2008年には183.0haと広がりを持つてきました。冬期湛水の田んぼには、コハクチョウも訪れ、冬鳥の休息地としても活躍しています。



▲2008年12月31日福田

**森の再生**は、管理放棄された山が広がり、松くい虫の被害によって、コウノトリが巣をかける松が減少してしまいました。そのなかで、わずかずつですが、山すその竹の伐採、松林の手入れ、松くい虫に強い、「ひょうご元気松」の植樹などが、行われています。



▲2008年5月24日福田巣塔

さらに巣に使う松が減少したことに伴い、人工**巣塔の設置**が2002年より行われてきました。

2008年3月現在で豊岡市全域に、全部で17基の巣塔が設置されています。これらの巣塔では、放鳥されたコウノトリが抱卵し、2008年には、4箇所の巣塔で、7羽のヒナが巣立ちました。

放鳥されたコウノトリたちは人間の思惑を越え、どんどん先へ進んでいます。

これらのコウノトリを現在の豊岡盆地は養うことができるのでしょうか。現在10羽以上のコウノトリが給餌を頼って、郷公園へ戻っていきます。豊岡のコウノトリが絶滅した38年前に比べて、決して環境が劇的に良くなっているとは思えません。まだまだ、コウノトリたちが安心して暮らしていける環境にはなっていないのです。

コウノトリたちは、自ら豊岡の空を舞うことで、人々の関心を高めています。市民がそれぞれの立場から、コウノトリを支援しようとする動きが広がっています。豊岡で生まれ、日本各地に広がっていったコウノトリたちが、ふるさととってくれるような豊岡にしたいと考えます。

2008年に抱卵した、2組のコウノトリに対して、抱卵、子育てへの給餌活動を市民の立場で行いました。まだまだ、不十分としか言えない今のコウノトリたちを巡る環境に、人間の直接的な援助も必要と考えます。

(宮村さち子)



## コウノトリレポート

### 2008年のコウノトリ

2008年の放鳥コウノトリは、市内各地にある人工巣塔のうち、百合地、福田、戸島、伊豆と保護増殖センターのケージ上を利用して、計8羽のヒナを巣立たせました。



▲2008年5月8日戸島

その中でも「ハチゴロウの戸島湿地」では、4月下旬に3羽のヒナが誕生し、親鳥の懸命な餌やりの結果、7月始めには1羽ずつ日にちを置いて見事に飛び立ちました。

巣立ち後しばらく5羽は一緒に行動していましたが、8月になり、しっかりと自分で餌を採れるように

なった幼鳥2羽が相次いで豊岡を離れ遠出してしまいました。残された幼鳥1羽は、郷公園で先輩コウノトリたちと共に行動をしています。

豊岡を離れた戸島生まれの幼鳥のうち1羽は、年末に兵庫県南東部の上郡町宇治山の鉄塔で当会会員の中野さんが目撃されています。あとの1羽は12月中旬現在、松江市にいるとの目撃情報が寄せられています。

2007年夏、国内46年ぶりに巣立った1羽の幼鳥は、繁殖期を前にして親鳥から厳しい親離れを強いられました。新田小学校の観察隊の子どもたちからニクタンという愛称をつけられて、いつも親鳥と一緒に行動して両親の愛護を一身に受けて育ちましたが、コウノトリの子別れ親離れの厳しさというものを、厳冬期の1月下旬頃目の当たりにして、私たちは野生動物の本能を教えられたことでした。しかし、戸島育ちの幼鳥3羽はもうすでに、親離れをしています。あっさり豊岡を後にして、行ったり来たりした幼鳥もいます。受け継いだ遺伝子が、独立精神旺盛な回路が組み込まれたものだったのかもしれない。

さて、2009年繁殖期を前に「ハチゴロウの戸島湿地」では、再び湿地内の人工巣塔で産卵、ヒナ誕生となるように、誘導作戦として湿地整備が進む中、給餌をおこなっています。

放鳥コウノリたちが豊岡市を広く棲み分けしてくれて、特に下流域での繁殖は、亡きハチゴロウが見つけてくれた生きものの宝庫である戸島湿地を保全再生していく上でも、大切なことです。

餌生物が地上から姿を消して冬眠するこの時期に、コウノリに給餌をして手を差し伸べることについて賛否両論ありますが、湿地が整備され湿地の中で餌生物が採れるようになる日までは、何らかの支援は必要と思います。

遠出した幼鳥は上郡町で住民登録をされました。この春巣立つであろう2009年生まれの幼鳥はど

こでどのように迎えられるのでしょうか。

▼2008年12月27日 赤穂郡上郡町の009  
(撮影:中野義樹)



(小谷 繁子)



#### コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿

##### 法人会員

喜多見印刷株式会社 つばきの旅館 ときわ別館 但馬調剤薬局 株式会社西村風晃園  
株式会社毛戸工務店 マリヤ医科興業株式会社 円山川漁業協同組合

##### 個人会員

東京都 花輪伸一 松井裕 神奈川県 菊地巧 菊地寿美枝 菊地義尚 菊地玲奈

埼玉県 石田比奈子 滋賀県 中村慶子 大阪府 荒田邦夫 大分県

羽田野泉

兵庫県 宍粟市 島本久子 高砂市 三嶋勝徳 養父市 北尾行雄

栃尾宣枝 中村由美

豊岡市 浅田千恵子 石田邦三 稲葉康介 井上明美 井上朝よし 井上俊宏 今井隆男

今村章次 大井小枝子 大伴成 岡田正司 岡本靖子 小田春夫 門脇明好 久保千賀子 熊原優樹

小西一司 さかき慶子 坂本京子 沢田秀実 瀬川孝光 関秋夫 瀬渡友一 高嶋京子 高嶋信之

谷口和夫 土肥博行 中川富紀子 西垣晴代 西村美恵 橋本昌孝 原実 日野西直子 藤原秀雄

舟木佐也子 松島久美子 松島一夫 松島興治郎 松本杉子 湊崎康雄 八木孝子 柳澤かほる

山本進 山本好美

(2008年12月25日現在)

ありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。



## 「心から心へ」

12月11日、仕事の帰りに戸島に寄ると、城崎大橋を渡ったところの田んぼで、コウノリのペアを発見しました。

「あら、こんなに近くに来てる」

現場には当会理事の荒川さんがおられたので、一緒に観察することに。2羽はほぼ寄せ合っても仲良しです。

荒川さんと私、思わず顔を見合わせニッコリ。

「仲がいいですねあ」と、荒川さん。



▲おけしよ社長

夕食の用意も気になるけれど、これでは帰れません。

当会代表の横田さんがアジをもってこられると、その様子を2羽がじっと見ています。

17時を過ぎ、湿地工事関係者の方が帰られると、待ってましたとばかりに2羽足並みそろえて、湿地内に置かれた餌場に直行します。

双眼鏡でのぞくと、食べてる食べてる。

その様子を見届け、横田さんの足取りは軽やか。工事の方も足早に、そっと脅かさないように帰られるよう。豊岡の寒い冬、コウノリの頑張りを少しでも応援したいと、皆の想いは繋がっています。



▲吉田さん

先日も皆のカンパにより、湿地内の池にフナを放流しましたが、あっという間に、カンパ目標額が

集まりました。外は寒いですが、心は温かい。私は、この繋がりの中にいることが、心地よくてたまりません。

給餌用のアジも、心から心の繋がりで行いただいています。



▲浜松さん

昨春の繁殖行動が始まった頃、皆は、「餌は、足りているのだろうか」と心配していました。友人の吉田さんが、おけしよ鮮魚店勤務なので相談すると、但馬漁協竹野支所の米田さんを紹介して下さい、その日のうちに、米田さんから電話を頂き、アジをもらいに行くと、「どんだけいるん？」

「また、電話もらったらあげるで」と。それから巣立ちまで、何回かお世話になりました。

その後、船主さんを紹介してもらいましたが、わざわざコウノリ用に分別してもらっているとのこと。お礼を言うと、笑顔で答えて下さいました。

城崎の鮮魚店から漁協さん、そして船主さんへと、今まで湿地ネットと何の繋がりもなかった関係が、コウノリによって、心だけで繋がりがもてたことを、嬉しく思っています。心から心に支えられて、コウノリは今日も冬空を舞っています。

( 森 薫 )



▲米田さん



あふれる思いを綴りました。

### 西村 英子

2005年9月、放鳥の日。秋晴れの空に向かって最初の1羽（J0232）が飛び立ったとき、声とも息ともつかぬ、腹の底から湧き上がったような『ウォーッ』が、何千と集まって辺りを包みました。あれは何だったのでしょうか。

言葉にすれば、様々あったのかもしれませんが、考えではなくあふれ出た思い、それを多くの人が共有した、そのことがあの日の一番の記憶です。

今、日本中を、あちらへこちらへと飛んでゆくコウノトリを、あたたかく見守って下さる方たちも、思いは同じではないでしょうか。

まだ、「コウノトリの豊岡」が今ほど知られていない頃、降り積もる雪の中で、緑の田で、抜けるような青空の中で、ハチゴロウはとても美しかった。

今、自由に空を飛べる鳥が29羽。仕事や買い物の途中に、その白く大きな姿を見つけると、とても嬉しい。餌採りが不器用で、人の近くで生きていく彼らを、一緒に住んでいこうや、と見守る仲間達がいることが、私はとても嬉しいです。

### 荒川 秀夫

城崎町戸島の湿地に「1羽の野生コウノトリが来ている」と聞いたのは3年前の9月半ばだった。撮ろうと決めて湿地へ行くと、水草花が咲き、深緑の山が共に水に映え、大きい鳥が美しく飛ぶ風景に感動した。その鳥は豊岡で松に巣を作り、毎日、早朝の正確な時間に来る事を教えてくれた。

ある朝カメラの準備をしている至近に降り立ち、落ち着いた風情で私を凝視するので驚かされ、野生動物の警戒心とは？毎日撮り続ける私を見ていたのであろうか。

彼は良き被写体、よき友であった。

季節はめぐり、ある朝彼の姿が消えた。多くのファンの心配が続いた末に、巣から遠からぬ厳冬の林で短かった命の亡骸があった。

美しく、野生に満ちた勇姿はもう戻らない。悲しみが私をおそった冬の日だった。

50年前、コウノトリを撮った無声8ミリ映画に、私は田舎の情景を描いた名曲「田園」を同期録音したことがある。今まさに、コウノトリの野生復帰に向け戸島に建設中の「市立ハチゴロウの戸島湿地」が完成後見られるであろう鳥の舞う風景にやはり古典の「田園」が調和する様に思われる。

### 「編集後記」

このニュースレターのタイトルが「パタパタ」と決まりました。名付け親は市立南中学校3年生の畑中尚也君です。実は彼が幼稚園児のとき、市が公募した市立コウノトリ文化館の愛称にこの名前応募したのですが、惜しくも次点となり採用されませんでした。しかし、素直な表現が妙に心に残り続け、編集会議で提案したら全員大賛同。市と本人(お父さん)の了解を得て9年目にして日の目を見ることになったのです。この名に恥じぬよう、ニュースレターもコウノトリと共に飛翔したいと思います。決して「パタパタ」ではなく。(佐竹)